

総体性をめぐる歴史社会学の方法

首都大学東京大学院博士後期課程 稲葉年計

1. 目的

この報告の目的は、日本において未だ手薄である総体的な視座に基づく歴史社会学（筒井 1997: 7）の研究を試みるにおいて、その方法論の全体像や問題点、可能性を問うことである。総体的な視座に基づく歴史社会学の意義は以下である。第1に、社会学が歴史性を確かに取り戻し、また、歴史を理論にあてはめるようなものでない、（日本の）歴史から理論を検討・構築するものへと志向する（森岡 2006: 125）。第2に、諸局面のダイナミズムに注意を払い、「政治、経済、文化の関連構造の中へ位置付けていく」（広田 1995: 36）ことや「多次元間を関連付けて構造的に把握していくこと」（広田 1995: 36）、すなわち諸領域の「連関的脈絡」（広田 1995: 36）を捉えること（広田 1995: 36）、第3に、「過去のデータの論理とコンテクストに没入すること」（広田 1995: 31-6）、つまりは、その時代の文脈のまま掘り起こすことが望まれる（広田 1995: 31-6）。第4に、社会学、社会学理論を歴史研究のなかで読み直すこと、第5に、「知のブローカー」（竹内 1995: 17）としての歴史社会学のパースペクティブの強みを活かす（「専門化の回避」（竹内 1995: 16））ことである。

2. 方法

スコチポルはすなわち歴史の具体的な因果連関からいわば帰納的規則性を得ようとするが、それはバラウオイ、カイザーやヘクターらによって、演繹法や演繹的な「一般理論」の必要性から批判にあう。こうしたスコチポルに代表されるアメリカ歴史社会学の方法論論争に始まる歴史社会学の先行研究を振り返りながら、理論的整序を行う。

3. 結果と結論

「部分」の比較分析を通じて「全体」の具現を試みる方法であるマクマイケルの「統合的比較」が大いに参考になることを示す。そして、これまで筆者が行なってきた後期近代日本の歴史社会学を参照しながら、以上で得られた方法論を具体的に比較検討の上、試みることで、その有効性と問題点を示す。

文献

- 広田照幸, 1995, 「教育・モダニティ・歴史分析 - 〈習作〉群の位置と課題 -」 『教育社会学研究第』 57, 23-39.
- 森岡清美, 2006, 「日本の歴史社会学」 『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』 40, 117-129.
- 竹内洋, 1995, 「教育社会学における歴史研究 - ブームと危うさ -」 『教育社会学研究』 57, 5-21.
- 筒井清忠, 1997, 『歴史社会学のフロンティア』 人文書院.